日蓮大聖人御書全集

一念三千法門

いちねんさんぜんほうもん

新版357～364

一念三千法門

正嘉2年（'58）　37歳

法華経の余経に勝れたること、いかなることぞ。この経に一心三観・一念三千ということあり。薬王菩薩、漢土に出世して天台大師と云われ、この法門を覚り給いしかども、まず玄義十巻・文句十巻・覚意三昧・小止観・浄名疏・四念処・次第禅門等の多くの法門を説きしかども、この一念三千の法門をば談じ給わず。百界千如の法門ばかりなり。御年五十七の夏四月の比、荊州玉泉寺と申す処にて、

御弟子・章安大師に教え給う止観と申す文十巻あり。上四帖になお秘し給いて、ただ六即・四種三昧等ばかりなり。五の巻に至って十境十乗・一念三千の法門を立て、「夫れ、一心に具す」等云々。これより二百年の後に、妙楽大師釈して云わく「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、成道の時、この本理に称って、一身一念法界に遍し」云々。この一念三千・一心三観の法門は、法華経の一の巻の十如是より起これり。文の心は、百界千如・三千世間云々。

さて一心三観と申すは、余宗は「如是」とあそばす。こ

れ僻事にて二義かけたり。天台・南岳の御義を知らざる故なり。されば、当宗には天台の所釈のごとく三遍読むに功徳勝まさる。

第一に「是相如（この相は如なり）」と、相・性・体・力以下の十を「如」と云う。「如」というは空の義なるが故に、十法界、皆空諦なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち報身如来なり。八万四千または般若とも申す。第二に「如是相（かくのごとき相）」。これ我が身の色形に顕れたる相なり。これ皆仮なり。相・性・体・力以下の十な

れば、十法界皆仮諦と申して仮の義なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち応身如来なり。または解脱とも申す。第三に「相如是（相は是に如す）」と云うは、中道と申して仏の法身の形なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち法身如来なり。または中道とも法性とも涅槃とも寂滅とも申す。

この三つを法・報・応の三身とも、空・仮・中の三諦とも、法身・般若・解脱の三徳とも申す。この三身如来全く外になし。我が身即ち三徳究竟の体にて、三身即一身の

本覚の仏なり。これをしるを、如来とも聖人とも悟りとも云う。知らざるを、凡夫とも衆生とも迷いとも申す。

十界の衆生、各互いに十界を具足す。合すれば百界なり。百界に各々十如を具すれば、千如なり。この千如是に衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば、三千なり。百界と顕れたる色相は、皆総じて仮の義なれば、仮諦の一なり。千如は、総じて空の義なれば、空諦の一なり。三千世間は、総じて法身の義なれば、中道の一なり。法門多しといえども、ただ三諦なり。この三諦を、三身如来とも三徳究竟と

も申すなり。

始めの三如是は、本覚の如来なり。終わりの七如是と一体にして無二無別なれば、「本末究竟等」とは申すなり。「本」と申すは仏性、「末」と申すは未顕の仏、九界の名なり。「究竟等」と申すは、妙覚究竟の如来と理即の凡夫なる我らと差別無きを、「究竟等」とも「平等大慧の法華経」とも申すなり。

始めの三如是は、本覚の如来なり。本覚の如来を悟り出だし給える妙覚の仏なれば、我らは妙覚の父母なり。仏は

我らが生むところの子なり。止の一に云わく「止は則ち仏の母、観は即ち仏の父なり」云々。譬えば、人十人あらんずるが、面々に蔵々に宝をつみ、我が蔵に宝のあることを知らず、かつえ死し、こごえ死す。あるいは一人、この中にかしこき人ありて、悟り出だすがごとし。九人は終に知らず。しかるに、あるいは教えられて食し、あるいはくくめられて食するがごとし。弘の一に「止観の二字は、正しく聞体を示す」と。聞かざる者は、「本末究竟等」もいたずらか。

子なれども、親にまさること多し。重華はかたくなわしき父を敬って賢人の名を得たり。沛公は帝王と成って後も、その父を拝す。その敬われし父をば全く王といわず、敬いし子をば王と仰ぐがごとし。それ、仏は子なれども、賢くましまして悟り出だし給えり。凡夫は親なれども、愚癡にしていまだ悟らず。委しき義を知らざる人、「毘盧の頂上を踏ふむ」なんど悪口す。大いなる僻事なり。

一心三観に付いて、次第の三観、不次第の三観ということとあり。委しく申すに及ばず候。この三観を心得すまし

成就したるところを、華厳経に「三界は、ただ一心なり」云々。天台は「諸水、海に入る」とのぶ。仏と我らと総じて一切衆生、理性一にてへだてなきを、平等大慧と云うなり。「平等」と書いては、「おしなべて」と読む。

この一心三観・一念三千の法門、諸経にたえてこれ無し。法華経に遇わざれば、いかでか成仏すべきや。余経には六界・八界より十界を明かせども、さらに具を明かさず。法華経は念々に一心三観・一念三千の謂れを観ずれば、我が身本覚の如来なること悟り出だされ、無明の雲晴れて法性

の月明らかに、妄想の夢醒めて本覚の月輪いさぎよく、父母の生むところの肉身、煩悩具縛の身、即ち本有常住の如来となるべし。これを即身成仏とも、煩悩即菩提とも、生死即涅槃とも申す。この時、法界を照らし見れば、ことごとく中道の一理にて、仏も衆生も一なり。されば、天台の所釈に「一色一香も中道にあらざることなし」と釈し給えり。この時は、十方世界皆寂光浄土にて、いずれの処をか弥陀・薬師等の浄土とは云わん。ここをもって法華経に「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」と説き

給う。

さては経をよまずとも心地の観念ばかりにて成仏すべきかと思いたれば、一念三千の観念も一心三観の観法も、妙法蓮華経の五字に納まれり。妙法蓮華経の五字は、また我らが一心に納まって候いけり。天台の所釈に「この妙法蓮華経は本地甚深の奥蔵、三世の如来の証得したもうところなり」と釈したり。さて、この妙法蓮華経を唱う る時、心中の本覚の仏顕る。我らが身と心をば蔵に譬え、妙の一字を印に譬えたり。天台の御釈に「秘密の奥蔵を発

く。これを称して妙となす。権実の正軌を示す。故に号して法となす。久遠の本果を指す。これを喩うるに蓮をもってす。不二の円道に会す。これを譬うるに華をもってす。声、仏事をなす。これを称して経となす」と釈し給う。また「妙とは不可思議の法を褒美するなり。また妙とは十界・十如・権実の法なり」云々。

「経の題目を唱うると観念と一なること、心得がたし」と愚癡の人は思い給うべし。されども、天台、止の二に「而於説黙」と云えり。説とは経、黙とは観念なり。また、

四教義の一に云わく「ただ功の唐捐ならざるのみにあらず、また能く理に契うの要なるかな」云々。天台大師と申すは、薬王菩薩なり。この大師、「説而観而」と釈し給う。元より、天台の所釈に、因縁・約教・本迹・観心の四種の御釈あり。四種の重を知らずして一しなを見たる人、一向本迹をむねとし、一向観心を面とす。

法華経に法・譬・因縁ということあり。法説の段に至って、諸仏出世の本懐、一切衆生成仏の直道と定む。我のみならず一切衆生直至道場の因縁なりと定め給いしは、

題目なり。されば天台、玄の一に「衆善の小行を会して、広大の一乗に帰す」と。「広大」と申すは、残らず引導し給うを申すなり。たとい釈尊一人本懐と宣べ給うとも等覚以下は仰いでこの経を信ずべし。いわんや、諸仏出世の本懐なり。

禅宗は「観心を本懐と仰ぐ」とあれども、それは四種の一面なり。一念三千・一心三観等の観心ばかり法華経の肝心なるべくば、題目に十如是を置くべきところに、題目に妙法蓮華経と置かれたる上は、子細に及ばず。また当世の

禅宗は、「教外に別伝す」と云い給うかと思えば、また捨てられたる円覚経等の文を引かるる上は、実経の文において御綺えに及ぶべからず候。智者は読誦に観念をも並ぶべし。愚者は題目ばかりを唱うとも、この理に会うべし。

この妙法蓮華経とは、我らが心性、総じては一切衆生の心性、八葉の白蓮華の名なり。これを教え給う仏の御詞なり。無始より以来、我が身中の心性に迷って生死を流転せし身、今この経に値い奉って三身即一の本覚の如来を唱うるに顕れて現世にその内証成仏するを、即身成仏

と申す。死すれば光を放つ。これ外用の成仏と申す。「来世に作仏することを得ん」とは、これなり。

「略して経題を挙ぐるに、玄に一部を収む」とて、一遍は一部なり云々。妙法蓮華経と唱うる時、心性の如来顕る。耳にふれし類いは、無量阿僧祇劫の罪を滅す。一念も随喜する時、即身成仏す。たとい信ぜざれども、種と成り、熟と成り、必ずこれに依って成仏す。妙楽大師云わく「もしは取、もしは捨、耳に経て縁と成り、あるいは順、あるいは違、終にこれに因って脱す」云々。日蓮云わく「もし

は取、もしは捨、あるいは順、あるいは違」の文、肝に銘ずる詞なり。法華経に「もし法を聞くことあらば」等と説かれたるは、これか。既に「聞くことあらば」と説かれたり。観念ばかりにて成仏すべくば、「もし法を観ずることあらば」と説かるべし。ただ天台の御料簡に十如是と云うは十界なり。この十界は、一念より事起こり十界の衆生は出で来りけり。この十如是というは、妙法蓮華経にてありけり。

この娑婆世界は耳根得道の国なり。以前に申すごとく、「当に知るべし、身土」云々。一切衆生の身に百界千如・

三千世間を納むる謂れを明かすが故に、これを耳に触るる一切衆生は功徳を得る衆生なり。一切衆生と申すは、草木・瓦礫も一切衆生の内なるか〈有情・非情〉。そもそも草木は何ぞ。金錍論に云わく「一草・一木・一礫・一塵、各一仏性、各一因果あり。縁・了を具足す」等云々。法師品の始めに云わく「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽、人と非人、および比丘・比丘尼、妙法華経の一偈一句を聞いて、乃至一念も随喜せば、我は皆ために阿耨多羅三藐三菩提の記を授く」云々。

非人とは、総じて人界の外、一切有情界とて心あるものなり。いわんや人界をや。

法華経の行者は、如説修行せば、必ず一生の中に一人も残らず成仏すべし。譬えば、春夏、田を作るに、早・晩あれども、一年の中には必ずこれを納む。法華の行者も、上・中・下根あれども、必ず一生の中に証得す。玄の一に云わく「上・中・下根、皆記別を与う」云々。

観心ばかりにて成仏せんと思う人は、一方かけたる人なり。いわんや、教外別伝の坐禅をや。法師品に云わく「薬王

よ。多く人有って在家・出家にて菩薩の道を行ぜんに、もしこの法華経を見・聞・読・誦・書・持・供養することを得ること能わずんば、当に知るべし、この人はいまだ善く菩薩の道を行ぜず。もしこの経典を聞くことを得ることあらば、乃ちよく菩薩の道を行ず」云々。観心ばかりにて成仏すべくんば、いかでか「見・聞・読・誦」と云わんや。この経は専ら「聞」をもって本となす。

およそこの経は、悪人・女人・二乗・闡提を簡わず。故に、「皆成仏道」とも云い、また「平等大慧」とも云う。

善悪不二・邪正一如と聞くところに、やがて内証成仏す。故に、即身成仏と申す。一生に証得するが故に、一生妙覚と云う。義を知らざる人なれども、唱うれば、ただ仏と仏とのみ悦び給う。「我は即ち歓喜す。諸仏もまたしかなり」云々。百千合わせたる薬も口にのまざれば病愈えず、蔵に宝を持てども開くことをしらずしてかつえ、懐に薬を持っても飲まんことをしらずして死するがごとし。如意宝珠という玉は、五百弟子品のこの経の徳もまたかくのごとし。

観心を並べて読めば申すに及ばず。観念せずといえども、始めに申しつるごとく「所謂諸法如是相如云々」と読む時は、如は空の義なれば、我が身の先業にうくるところの相・性・体・力、その具するところの八十八使の見惑、八十一品の思惑、その空は報身如来なり。「所謂諸法如是相云々」と読めば、これ仮の義なれば、我がこの身、先業によって受けたる相・性・体・力云々。その具したる塵沙の惑ことごとく即身応身如来なり。「所謂諸法如是」と読む時は、これ中道の義に順じて、業によって受くるところの相・性等

云々(うんぬん)。それに随(したが)いたる無明皆退(むみょうみなしりぞ)いて、即身法身(そくしんほっしん)の如来(にょらい)と心(こころ)を開(ひら)く。この十如是(じゅうにょぜ)、三転(さんてん)によまるること、三身即一身(さんじんそくいっしん)・一身即三身(いっしんそくさんじん)の義(ぎ)なり。三(みっ)つに分(わ)かるれども一(ひと)つなり。一(ひと)つに定(さだ)まれども三(みっ)つなり。